

◇ 卷頭言 ◇

式 正 英

中世ヨーロッパの都市に起源する大学の組織は、幾多の変転を経た後、19世紀になって「真理探求の場」として学問、研究の自由の保証された大学がつけられたと云われる。この意味で大学は近代社会の生み出した最も優れた組織だと云う人がある。そうだとしてもこれが機能しなければ有名無実と云うことでしかない。事実つい最近の大学紛争で、大学の本質が問われたりもした。「開かれた大学」と言う言葉もしばしば聞かれる。日本の大学、私共の大学そして教室は、一体、社会に対してどの程度開かれているのであろうか。又「開かれる」とは何を対象にして考えたらよいのであろうか。大学に籍をおく者としては、自らの現状を顧みる意味で、この問題について深く考えてみなければならぬと思う。

本学のような小規模な大学でも、大学らしく機能する為に、まづ組織づくりが必要である。自らを積み上げてゆく建設の歩みが、この所、学内での一つの流れになって来ている。昭和39年には修士講座が採用されて、研究体制の充実が指向され、昭和51年には博士課程の人間文化研究科が誕生した。その後専攻が増設されて、本年からは理科系を包含した、つまり全学部にもたがる総合大学院である同研究科が整備されることになった。来年には初めて新博士課程の修了者が世に送り出されることになる。

組織は整備されて来たが、内実はどうなのであろうか。新制度になって大学になった所謂「新制大学」の中で、博士課程をもつ様になった大学は、静岡大学電子工学科と本学の二例に過ぎない。誇るとすれば、この組織が世間に開かれた立派な成果を生んでからのことである。今はこの総合大学院は世間の注視を浴びていると言う段階にあるのだろう。現在にはほゞ30名の博士課程の学生が在籍しており、学部で地理を学んだ人も2名いる。博士課程の研究棟建設の予算も認められ、本年中には建物も出来上がる。物理的な容れ物も出来上がるとなると、研究の遅れがあるとしても、これを物質条件の不備のみ帰する訳にはいなくなる。博士課程の研究に対する本質的要求は、独創性にあるが、若い研究者や女性研究者に、総合的分野の研究能力があるかどうかは、今の所未知の状態にあると云ってよい。博士課程在籍者やこれを目指す学生は、正にこの問題を未来に開く、その担い手と云ってよい。

大学を社会に開くことは、特に国公立大学の場合には当然の義務ではないかと思う。ドイツの州立大学でもアメリカの州立大学でも、その地質鉱物標本室は日曜日も含めて市民に無料で公開されている。これに比べて日本の大学は閉鎖的で、形だけの権威をひけらかしている様に思えてならない。学問研究の蓄積から、湧き出て来る自信が、大学を開くことになる自然の成り行きだと思われる。本学でも公開への努力は余り目立つ程とは云えない。家政学部が中心になって、公開講座が夏の間開かれていることは、試行的にしる悪いことではない。本教室の談話会も本年で30回を越える筈である。これは公開という程ではないが、卒業生と教室との知的な紐帯になればという意味で、公開の方向を向いた姿勢と理解して頂きたい。1980年の9月初めには、東京で国際地理学会議が開催されることになっている。この時こそ本教室の関係者・卒業生も欣然としてこれに参加し、世界に対して開かれた形でその学問や研究の実力を示して欲しいものである。この意味の大学の機能こそ真の「開かれた」意味ではなからうか。